

J.E.K.S. The Japan Electronic Keyboard Society

日本電子キーボード学会

第1回全国大会

～音楽文化における電子キーボードの位置づけを探る～

大会要項

主 催：日本電子キーボード学会第1回全国大会実行委員

と き：2005年11月5日(土) 10:30～18:00

と ころ：昭和音楽芸術学院(川崎市麻生区万福寺1-16-6)

目 次

ページ

ごあいさつ	吉田 泰輔(日本電子キーボード学会代表、国立音楽大学理事長)……………	1
スケジュール	大会プログラムおよび会場……………	2
基調講演	夏田 昌和(作曲家、国立音楽大学講師)	
	“作曲家からみた電子キーボードの可能性”……………	4
研究発表		
	「上海音楽学院と電子オルガン伴奏によるミュージカル」……………朱 磊(中国・上海音楽学院)	5
	「台湾における電子オルガン教育と今後の方向性」……………王儷夏(台湾・台南女子技術学院)	6
	「現代の音楽展『デジタル・ピアノ・パフォーマンスの世界』」……………赤石敏夫(作曲家)	7
	「M.L.による音楽教員養成のための授業方法について」……………柳田孝義(文教大学)	8
	「考える音楽科教育」のための電子キーボード活用 その試論……………田中健次(茨城大学)	9
	「日本歌曲のピアノスコアを用いた電子オルガンの一考察」……………伊倉由紀子(昭和音楽大学)	10
	「ソルフェージュ教育へのM.L.の取り組みに関するレポート」……………森 直紀(昭和音楽大学)	11
	「音楽教育におけるテクノロジーの活用法と今後の課題」……………木村英寛(浜松学芸高等学校)	12
	「韓国における電子オルガン認知の現状」……………田中久明子(電子オルガン指導者)	13
	「唱歌ボランティアにおける電子キーボードの役割」……………小沢真弓(市川市社会教育指導員)	14
	「科学技術と身体性～電子オルガンを足場にして～」……………森松慶子(国立音楽大学)	15
	「オンドマルトノと最新型電子オルガンの演奏比較」……………久保智美(オンド・マルトノ演奏家)	16
	「最新型電子オルガンとマルチトラックアサイン」……………小熊達弥(サウンドインターフェイス)	17
コンサート	……………	18

ごあいさつ

吉田 泰輔（学会代表 国立音楽大学理事長）

日本電子キーボード学会の記念すべき第一回研究大会開催にあたり、学会設立のためご尽力・ご協力いただいた多数の方々と共に、学会の誕生を祝し、今後の発展・隆盛を期したいと思います。昨年開催された設立準備大会には、関係各方面の方々のご参加をいただき、成功裏に終了させることができました。その際に、学会設立に関して頂戴した様々なご意見・ご批判を踏まえ、この一年、実行委員会は会の組織運営や研究分野の区分・明確化等のため、準備に力を尽くしてまいりました。また設立趣旨に賛同して入会を希望される方々への情報の普及にも努めてまいりました。とりわけ、下八川理事長を始めとする昭和音楽芸術学院の方々には、事務取扱や会議場所の提供など、種々のご支援ご配慮を賜りましたし、また今研究大会のために会場をお貸しいただくなどのご協力をいただきました。学会を代表して心からの謝意を表明する次第です。

この第一回研究大会では、会則の制定等を合議する総会が設定され、今後の学会の組織や運営のあり方を決定することとなります。それにもまして重要なのは、様々な領域での研究発表であり、ある意味で学会の今後の方向性に重大な影響をもたらすものであると認識しております。すでに準備大会での話題にもなりましたように、電子キーボードを取り巻く内外の情勢は決して楽観を許さないものがありますが、この分野のメディアと音楽の中心的な発信地であるこの国での表現・教育・理論のありよう次第に、独自の音楽文化を育む展開が広がるか狭まるかが懸かっていると申しても言い過ぎではないでしょう。その意味でこの学会の活動の意義は、将来的に決して小さいものではなく、質量共に多彩な研究の発表やそれらをめぐる論議が積み重ねられれば、電子キーボードに関係する人たちに止まらず、広く音楽界全体に刺激を与え、新しい文化を生む動因の一つともなり得ると期待されるのです。それだけに、できるだけ多くの個人や機関に会員としてご参加いただき、研究や議論の質を高めることがぜひとも必要とされています。また学会としても、可能な限り、研究面に止まらず、実践的かつ啓蒙的活動を展開し、この分野における世人の関心を高めたいと考えておりますので、この研究大会を契機として、関係各位のいっそうのご協力とご援助を期待しております。

平成 17 年 11 月 5 日

日本電子キーボード学会「第1回全国大会」プログラム

11月5日(土)

09:30 受付

10:30 開会

あいさつ 下八川共祐(昭和音楽大学理事長)

吉田 泰輔(日本電子キーボード学会代表、国立音楽大学理事長)

10:45 基調講演 “作曲家からみた電子キーボードの可能性” 夏田 昌和(作曲家、国立音楽大学講師)

11:15 総会

1. 開会の辞
2. 議長選出
3. 報告 (1)2004年度～2005年度上半期活動報告
(2)2005年度上半期会計報告・同監査報告
(3)その他
4. 協議 (1)日本電子キーボード学会会則(案)について
(2)編集委員会規程(案)について
(3)投稿規程(案)について
(4)2005年度事業計画(案)について
(5)第2回全国大会開催候補について
(6)その他
5. 閉会の辞

13:00 研究発表

- 「上海音楽学院電子オルガン伴奏によるミュージカル」……………朱 磊(中国・上海音楽学院)
- 「台湾における電子オルガン教育と今後の方向性」……………王夏儷(台湾・台南女子技術学院)
- 現代の音楽展「デジタル・ピアノ・パフォーマンスの世界」
～電子ピアノで新しい表現の可能性を～(映像と音楽の融合)……………赤石敏夫(作曲家)
- 「M.L.による音楽教員養成のための授業方法について」……………柳田孝義(文教大学)
- 「考える音楽科教育」のための電子キーボード活用 その試論……………田中健次(茨城大学)
- 「日本歌曲のピアノスコアを用いた電子オルガンの一考察」……………伊倉由紀子(昭和音楽大学)
- 「ソルフェージュ教育へのM.L.の取り組みに関するレポート」……………森 直紀(昭和音楽大学)
- 「音楽教育におけるテクノロジーの活用法と今後の課題」……………木村英寛(浜松学芸高等学校)
- 「韓国における電子オルガン認知の現状」……………田中久明子(電子オルガン指導者)
- 「唱歌ボランティアにおける電子キーボードの役割」……………小沢真弓(市川市社会教育指導員)
- 「科学技術と身体性～電子オルガンを足場にして～」……………森松慶子(国立音楽大学)
- 「オンドマルトノと最新型電子オルガンの演奏比較」……………久保智美(オンド・マルトノ演奏家)
- 「最新型電子オルガンとマルチトラックアサイン」……………小熊達弥(サウンドインターフェイス)

17:00 コンサート

電子オルガンソロ(カワイ、ローランド、ヤマハ)

・C.ドビュッシー:前奏曲より“沈める寺”ほか……………大石純都(カワイ/ドリマトーン)

・映画「サルサ」より“これは朴の歌そして君の歌”ほか……………熊埜御堂加奈子(ローランド/ミュージックアトリエ)

・曾 夢:組曲「夢」より“眠りにつく”“迷宮”ほか……………曾 夢(ヤマハ/エレクトーン)

電子オルガンアンサンブル(カワイ:1台 ローランド:1台 ヤマハ:2台による)

F. スッペ オペレッタ「軽騎兵序曲」

演奏:昭和音楽大学エレクトロニック・オーケストラ

電子オルガン:小倉裕子(ローランド) 杉田香織(ヤマハ) 武井鮎(ヤマハ) 中村笑美(カワイ)

指揮:野口剛夫(昭和音楽大学講師)

会場別スケジュール

10:00	受 付(玄関入口)		
	5F ラ・サーラ・スカラ		
10:30	開会あいさつ 下八川共祐 吉田泰輔		
10:45	基 調 講 演 夏田昌和		
11:15	総 会		
12:00	(ラ ン チ)		
	研究発表 =ラ・サーラ・スカラ(5F)。 =301(3F)	303(3F)	305(3F)
13:00	研究発表		
13:30	研究発表		
14:00	301(3F)	(ティータイム)	
14:30	研究発表	研究発表	研究発表
15:00	研究発表	研究発表	研究発表
15:30	研究発表	研究発表	研究発表
16:00	研究発表		研究発表
16:30	(ティータイム)		
	コンサート(5F ラ・サーラ・スカラ)		
17:00	・電子オルガンソロ(カワイ、ローランド、ヤマハ) ・電子オルガンアンサンブル(カワイ、ローランド、ヤマハ)		
18:00	終 了		

作曲家からみた電子キーボードの可能性

夏田 昌和（作曲家・国立音楽大学）

作曲家が作品を創作するにあたり、電子キーボードが活用されるケースは実に多様である。

創作の現場を考えれば、まず作曲上のプロセスに電子キーボードが援用される様々なケースが考えられるであろう。楽曲の記譜にノーターション・ソフトを用いる傾向は、若い世代を中心に次第に顕著になりつつある。この際、音符入力の一手段として、また作品のシミュレーション演奏の音源・出力機器として、しばしば電子キーボードが選ばれる。この場合、単に清書や完成結果の模擬的確認に留まらず、作曲途中でのシミュレーションと、フィードバックを繰り返すという、従来の五線紙上での作曲過程とは異なる作曲プロセス自体が、若い世代の多くに見られる傾向であることも指摘したい。こうした事柄が、「作曲」や「音楽作品」のあり方に、根本的な変革を強いる可能性もある。

また、所謂 DTM の様に、器楽作品のシミュレーションとしてではなく、電子キーボード等を用いてシーケンサに打ち込んだ音楽が、それ自体最終的な発表形態であるというケースもあり、こうした「打ち込み」（録音）パートと生楽器の共演という形態もまた、多く存在する。

私自身の作品創作過程においては、電子キーボードは何より微分音程の確認作業に、その力を発揮してくれている。古典音楽の時代より、作曲家の多くはまずピアノを用いてスケッチを書き、その後オーケストレーションするという方法で作曲してきた。現代の音楽の多くはピアノ譜に記譜するにはあまりに複雑であり、このような手順を踏むケースはむしろ稀であろう。それでも楽曲のごく一部分の響きを、作曲途中に鍵盤で確認する作業は存在する。殊に、微分音程は我々音楽家が受けた音感教育には未だ含まれておらず、微分音程を多く含む旋律や和音を、内なる耳のみで聴くには困難さが伴う。こうした時、基本ピッチや鍵盤毎のチューニングをセント単位で変えられる電子キーボードは、ピアノに代わり、作曲家にとって実に力強い作曲ツールとして機能する。

次に、実際の演奏媒体として電子キーボードがソロ、或はアンサンブルの一員として用いられるケースはどうか。この場合もその用い方は多様である。一般的には電子的な音響が欲しい場合（生演奏の電子音楽）だろうが、その他にもサンプラーとして用いる場合（ライブのミュージック・コンクレート）や、MIDI を通して他の電子機器や音源の操作を担当する場合もあり、また経済上の問題からピアノやオルガンもしくは各種鍵盤打楽器等の代用として用いられる場合もある。何れのケースにおいても、生み出される音響だけを考えれば、それが必ずしも「鍵盤型」である必要はない。しかしながら、楽譜を追いつつ他の奏者や指揮に合わせて「演奏」という行為は、経験を積んだ音楽家以外には難しく、またそうした音楽家の多くにとってボタンや、カーソル、マウス等よりも、鍵盤の方が余程扱い易いことは大きな利点であろう。

私自身が電子キーボードを用いた作品は多くはないが、こうした作品では単に電子的音色を欲するのではなく、アコースティック楽器では生み出せない新しい音響や時間体験が追求されている。それらは例えば人間の手によっては到底実現できない程の「速度感覚」であったり、生楽器では非常に困難な微分音程の多用や、異なるピッチシステムの重ね合わせであったりする。

芸術音楽における作曲家の使命は、それまでの誰もが無かったことがない、新鮮にしてかつ新たな美的な価値を有する聴取体験を提供することに尽きる。こうした音楽創造の場において、電子キーボードの果たす役割は、今後もますます増して行くと思われる。

講演者略歴：1968年東京生まれ。東京芸術大学大学院修了後、パリ国立高等音楽院にて作曲をGérard Grisey、指揮をJean-Sébastien Béraudに学び、審査員全員一致の首席一等賞を作曲で得て卒業。出光音楽賞(1992)や芥川作曲賞(2002)を始め、作曲と指揮の両分野において内外での受賞多数。Ensemble Intercontemporain、Ensemble 2E2M、フランス文化省、サントリー音楽財団他からの作品委嘱に加え、指揮者として数多くの現代作品の紹介に携わっている。国立音楽大学、東京芸術大学、桐朋学園大学、日本大学芸術学部にて講師。Ensemble Contemporary 演奏部門統括・指揮者。日本現代音楽協会理事。

上海音楽学院電子オルガン科とミュージカル

朱 磊 (中国・上海音楽学院)

通訳 森岡 葉 (音楽ライター)

1. 中国における最初に電子オルガンの現状

音楽大学の電子オルガンの活用状況においては、他学科との協力、他楽器とのアンサンブルが積極的に推進されている。アコースティック楽器とのアンサンブル、コンチェルト、声楽の伴奏・アンサンブル、オペラ伴奏、ミュージカルの伴奏(ハイブリッド・オーケストラ)。

特にミュージカルにおける電子オルガンが果たす役割は、近年ますます重要になっている。上海音楽学院のミュージカル科では、練習、リハーサル、本番すべてにわたって電子オルガンが使われ、大きな役割を果たしている。これは他の音楽学院のミュージカル科と大きく異なる点である。

2. 電子オルガンのミュージカルに於ける役割と成果

2003年1月に上海グランドシアターで上演された大型創作ミュージカル『日出(日の出)』のオーケストラ・パートは、電子オルガン1台と電子ピアノ1台で演奏された。これは、電子オルガンがミュージカルの伴奏を初めて全面的に担当した最初の例である。その後、上海音楽学院ミュージカル科の毎回の公演で、電子オルガンは欠かすことのできない役割を果たしている。

2004年5月、上海音楽学院賀緑汀音楽庁(ホール)で2日間にわたって行われた『ミュージカル・ハイライト・コンサート』では、『キャッツ』『オペラ座の怪人』『レ・ミゼラブル』『ミス・サイゴン』などのハイライト・シーンを上演したが、2台の電子オルガンが小編成のオーケストラに加わり、重要な役割を果たした。また、2004年9月、上海グランドシアターで上演された『レ・ミゼラブル』のハイライト上演では、2台の電子オルガンがオーケストラ・パートを担当した。

その後、2004年11月の賀緑汀音楽庁(ホール)、2004年12月蘭心大劇院、2005年2月東方芸術センターで上演されたミュージカル公演で、電子オルガンは他に比べるものがない役割を果たし、大きな評価を受けている。これらの公演では、小編成のオーケストラに、2台の電子オルガン、一台の電子ピアノとシンセ・ドラム、そして一台のミキサーが加わって伴奏を担当した。

3. 電子オルガンによるミュージカル伴奏の長所

ピアノとの比較: ピアノの音色は単一で減衰するため、想像できる世界が小さく、オーケストラ的な音楽表現や雰囲気をつくることはできない。レッスンや初期のリハーサルにしか適さない。電子オルガンは、ピアノに足りない部分を補うことができる。

オーケストラとの比較: オーケストラをレッスンや練習、リハーサルに使うことはできない。しかし、電子オルガンは場所や時間や費用の制約を解決し、オーケストラに近い豊かな音色でレッスンやリハーサルに役立つことができる。

ミュージカルは、オーケストラの音色だけでなく電子音や効果音が必要な場合が多い。また、ブロードウェイ・ミュージカルの中の多くの楽曲はポピュラー音楽として親しまれている。20世紀の50年代から70年代にかけての、ビートルズ、ジャズ、フュージョン、ロックは、ミュージカルの作品の中に大きな影響を与えている。

ミュージカルのオーケストラ編成はもともと大きなものではない。もちろん『ウェスト・サイド物語』のように二管編成のオーケストラを使うものもあるが、ほとんどの場合、それほど大きな編成のオーケストラを必要としていない。『オペラ座の怪人』のような大作でも、オーケストラ編成は2台のミキサーと10台の弦楽器、1組の管楽器と打楽器という編成である。ミュージカルのオーケストラ編成でよく見られるのは、小規模なオーケストラに融通の利く楽器を組み合わせた編成である。電子オルガンをミュージカルの伴奏に活用すれば、中規模、小規模のオーケストラでも豊かな音楽の世界を作り出すことができる。今後、ミュージカルへの電子オルガンの活用をますます広げ、発展させていきたい。

台湾における電子鍵盤楽器教育と今後の方向

王 夏儷（台湾・台南女子技術学院）

通訳 李浩麗（声楽家）

1. 台湾における電子オルガン科設置と推移

- ・ 1975 年、日本の大学に相当する台南女子技術学院音楽科（当時は台南家政専門学校）に設置された。現在はピアノ専攻と合併し「鍵盤学科」となっている。
- ・ 2001 年、台湾・東海大学音楽科大学院にエレクトーン専攻が設置された。現在 5 名の学生が在籍。4 年を経過しているが、まだ修士号を取得した学生はいない。
- ・ 1995 年より現在までの 10 年間に、次の大学がエレクトーン課程を設けた。
台北国立師範大学音楽科（副科）・・・現在も存続
台中東海大学音楽科および台北文化大学音楽科・・・現在は廃止
- ・ 1985 年より現在までの 20 年間に、次の高校、職業高校がエレクトーン課程を設けた。
台北華崗芸術学校音楽科・・・現在も存続
高雄樹徳家商、高雄楽育高校、台中青年高校各音楽科・・・現在は廃止

2. 高等学校教育機関における電子オルガン科廃止の要因

- ・ モデルチェンジ ・教材 / 講師不足 ・学生募集難 ・一般社会での低認知度
- ・ 音楽教育界の保守性 ・講師セミナーの減少と自信欠如 ・学生の卒業後の進路難

3. 電子オルガン教育の流れと現状

1994 年～2000 年に多くのエレクトーン講師が全日本電子音楽教育研究会に参加し、エレクトーンは大衆的な楽器からクラシック教育にも通用する高度な楽器へと人々の見方が変わった。この楽器の教育熱が一気に高まり、ヤマハの代理店であった功学社の協力の下、オリジナル作品や論文の発表、様々な形態のコンサート活動（Ex：協奏曲、アンサンブル、オペラ伴奏など）が行われた。

しかし、2000 年以後の社会変化に電子オルガンに関する研究機関が設立されていなかった事が加わり、エレクトーン指導者やそれを目指す人たちが自信喪失や不安を招き、次々と現場を離れていく現象が起こって現在に至っている。エレクトーンを用いた活動も少なくなり、今ではヤマハの小さなコンサートや交流会、講座などが行われているだけである。

そのような中であって、2001 年に台中の東海大学音楽学部が郭宗愷教授の努力により、台湾初のエレクトーン修士課程が設置されたことは明るいニュースである。しかし修士課程に進学するには、まず大学卒業生を輩出していかなければ後が続かないという新たな問題が浮上してきている。

エレクトーンが音楽教育や演奏において優れている面があるにもかかわらず、台湾において電子鍵盤教育が大変危ぶまれる状態にある事は残念なことである。電子鍵盤教育が正しく認知されるためには、台湾にも日本電子キーボード学会のような組織を早急に設立することが必要である。経験豊かな日本の諸先輩方の率直なご意見をお聞かせ願いたい。

現代の音楽展「デジタル・ピアノ・パフォーマンスの世界」
～電子ピアノで新しい表現の可能性を～《映像と音楽の融合》

赤石 敏夫（作曲家）

電子ピアノ（デジタル・ピアノ）は15年ほど前にアコースティック・ピアノ（従来のピアノ）の販売量を上回るようになった（経産省楽器販売統計）。デジタル・ピアノは一般家庭に徐々に浸透している。購入される方の主な理由は、その機能を使いたいということではなく、安いからである。そして、殆んどが従来のピアノの代用品としての使い方だ。しかし、そのデジタル・ピアノで音楽は奏でられるのであり、またそこに感動も生むわけである。そして初めてピアノに触れるのはデジタル・ピアノからということも起きている。

デジタル・ピアノが、従来のピアノのために書かれたピアノ音楽の演奏表現と同じことができるかと問われれば、それはまだまだだろう。しかし、ミュージックデータの再生や瞬時に演奏の録音再生ができるシーケンス機能、また、即興演奏したものを楽譜表示できたり、多彩な音色数を持ち、パソコンとの連動ができるなど、従来のピアノとは違う、別の楽器としての存在感がある。所謂、ピアノの形をしたミュージック・ワーク・ステーションということができる。鍵盤楽器演奏人口としては最も多い、ピアノの演奏技術があれば様々な表現の可能性があるので。

その楽器に対して、芸術音楽を生業としている作曲家が可能性を試す「場」を作りたかった。また、デモンストレーターではなく、「普通の」ピアニストに、この楽器をとことん弾いてもらってその可能性を見極めたかった。

このコンサートでは、もう一つ「映像」も同時に投影するという試みも行なった。これは「デジタル」ということが重要な要素だ。デジタルであるがゆえに演奏と映像の同期ができるのである。今後は音だけのコンサートより、視覚効果を考えたコンサートが増えるだろう。これも時代の要請だ。日常的に使われるようになったデジタル・ピアノ。この表現手段を使って、新しいピアノ音楽の創出を現音から発信したい、というのが趣旨だった。

多少時間が経過したが、このコンサートを制作して体験したことと、デジタル・ピアノの活用による音楽教育も含めた音楽活動の活性化、そして電子楽器のための作品について意見を述べたい。

【主催】日本現代音楽協会 プロデューサー：赤石敏夫

日時：2003年3月3日（月）19:00 開演 会場：津田ホール

【演奏曲】（演奏順・敬称略）

ジョン・アダムズ「チャイナ・ゲイト」（1977）

宮木朝子「見出された青」（2002）

水野みか子「シュテファンの腕時計」（2000）

藤原嘉文「ヴィジョン ～デジタル・ピアノのための」（2003）

赤石敏夫「稜線の彼方から青い月が...」（2000）

ラモン・P.サントス「クルンタン」（1992）

中嶋恒雄「春思桃景」 デジタル・ピアノのための（2002）

松尾祐孝「パッサカリア」（1983/2003）

【ピアニスト】宮木朝子 / 土屋律子 / 里見暁美 / 蛭多令子（順不同・敬称略）

MLによる音楽教員養成のための授業方法について

柳田 孝義（文教大学教育学部）

電気楽器の歴史は20世紀の後半からめざましく発展を遂げ、各家庭にまで普及するようになったが、それをベースに電子楽器は特にこの10数年来、技術革新による利便性、多様性、表現力などの面で著しく変化し発展してきた。これに伴い全国の大学における学校教員養成課程でも電子オルガン、電子ピアノなどのいわゆるML（music laboratory）が導入され普及してきたが、その目的は主に技能実習に限られていた。教員の技術指導の効率を高めることは初期の目的からすれば当然のことであるが、私は、それは教育のマスプロ化の範囲にとどまるものではないか、さらにMLの有効活用が可能ではないかという問題意識を持つようになった。今日のMLの機能にはコンピュータ機能を有し、さらに多面的な表現が可能な機能も多く含まれている。

次に掲げる事例は私が教員養成学部の音楽科の学生に対し、8年前からいくつかの試みを実践してきたその一端である。MLの有効な活用によって、学校教育における音楽教員の質を高めることができることを目標としている

・和声学、作曲法における活用事例

1. 和声学の授業にMLを使い、楽譜をその場で弾かせて確認し、鍵盤和声面でも能力向上を図る。
2. また移調、移旋などの練習も十分で教師が個別に確認できる。
3. 教師用の電子ピアノにはカメラが備えられており、教師の運指を参考に模倣奏などをさせる。
4. 結果として90分授業に無駄な時間が少なくなり、演習の時間が増え和声学の進度も速くなったといえる。
5. 作曲法としては、楽想（スケッチ）を紙の上だけでなく、FDに録音させる方法をとっている。

・ソルフェージュにおける活用事例

1. 聴音では従来は五線紙に記譜するのみであったがそれを記憶して歌うほかに、鍵盤で再現させている。
2. また種々の楽器の音色を聞き分けることが可能になり、数声部の楽譜を実際に近い感覚として捉えられる。
3. 楽典に関し、音程、音階、和音、調について課題に音を伴い、楽典とソルフェージュの相乗効果がある。
4. アンサンブルや平易なオーケストラ曲の楽譜を与え、移調楽器の再現も含めて合奏。アンサンブル、オーケストラのサウンドを味わいながら、楽譜を読むスピード、全体像を理解する能力の開発を図っている。
5. 各々の電子ピアノに小型ディスプレイを設置したことで教師が教材を豊富に提示できるようになり学習の範囲が広がった。さらに学生がいちいち教材を購入するという手間も費用も少なくなった。

・楽器学における活用事例

1. 電子ピアノの16トラックの録音機能を活用し、様々なアンサンブルによる編曲を試みている。
2. アコースティックな音だけでなくデジタル音、効果音などの音の世界にも興味を持たせることができる。
3. モバイルパソコンを接続した楽譜製作などの可能性の活用。

ML教室は従来、ピアノの初心者向けの技能実習室として使用されてきたものである。その初期は電気オルガンを並べたものが今日、楽器のイノベーションも目覚しく進み、従来の目的のためだけではない活用方法があると考えている。あくまでもMLはそれ自体が目的のではなく、MLを使い如何に音楽の能力を向上させられるか、が重要である。一つの発達したツールとして使用するのが目的であり、MLを教えるということではない。

したがってMLによって得られた能力が音楽教師となる学生にとって、実際の音楽という場のなかで活かすのでなければならない。MLはそのような意味でmusicのMから多様性を意味するmulti（マルチ）のMとして活用できる大きなメディアとなるのではないかと考えている。

「考える音楽科教育」のための電子キーボード活用 その試論

田中 健次（茨城大学）

私は現在の音楽科を「考える音楽科」へと変革すべきだと考えている。この変革なしに音楽科の存在意義を主張することは不可能である。

本発表は「考える音楽科」のために、これまでとは異なる電子キーボードの教育的活用の理念と方法論を探ろうとするものである。

平成元年告知の学習指導要領で、目標に「感性」という言葉が示された。しかしそれ以前から、音楽科の目標は、「心情」「感性」「情操」といった心理的な概念によって記述されてきた。音楽という教科の特殊性から見れば、このような目標もそれなりの意義をもっていた。

一方、社会環境の変化、社会の学校に対する要望等によって、音楽科はその存在価値を希薄にしていることも事実である。すなわち、社会教育における音楽学習の機会が増えるなかで、次のような議論が必要になっている。

(1)音楽科教育はそれらとどのように差別化できる学習活動をもちえているのか。

(2)また音楽科教育においては、どのような「目にみえる学力」を形成しているのか。

これらについて現在のところ十分な回答は得られていない。

このようななかで、たとえば、吉田孝（弘前大学教授）が提言する「賢い音楽消費者を育成する音楽科へ」（八木正一・吉田孝編著『新・音楽科宣言』学事出版：東京、1996）という主張も、音楽科の存在意義を明白にするという意味で傾注に値する。

音楽科教育の現状のなかで、その存在意義を明確にするためのひとつの戦略として、「考える音楽科」、「学習する音楽科」のあり方を構築したいと考えている。

他方、義務教育における音楽科教育における電子キーボードの活用もある意味で行き詰まりをみせている。

そこで用いられる楽器のほとんどは、電子オルガンではなく、1980年代から普及したいわゆる電子キーボード類である。その活用のあり方は次のようなものが主になっている。

器楽領域における音域の充足等や、代替楽器としての活用

作音楽器としての活用

近年における と の領域にわたる、電子音とアコースティック音の融合による新しい音世界の創造
私は、これらの活用事例について次のように考えている。

の代用楽器としての使用は、学校教育の場において、従来の意味の楽器の充足をもたらすが、代替楽器は「代替」である限り、それ以上に廉価で機能のもつ機器類が出現すれば、その役を終わることは、教育の場だけでなく楽器の歴史を振り返れば一目瞭然である。

の作音楽器としての活用法、たとえばシンセサイザーのように作音を主目的とする楽器においても、実際の教育の場では、すでにプリセットされた音を用いての事例がほとんどであり、けして「作音」という本来機能を活用しているとは思えない。

電子音とアコースティックの音の融合による新しい合奏形態を想定しても、主に既存の音楽文化を学ぶことが多い音楽科教育においてそれら新しい音世界を必要とする必然性の場がどれだけあろうか、はなはだ疑問が残る。

上記にしめした音楽科教育の存在意義のための戦略、すなわち「考える音楽教育」のために、とくに義務教育を対象にしながら従来とは異なる電子キーボードの活用ができる可能性がないか、その理念と方法論を探ろうとするものである。

歌曲における電子オルガンの可能性

伊倉 由紀子（昭和音楽大学）

近年、オペラやミュージカル公演において、電子オルガンが使用される機械は著しく増え、で理解度、認知度も上がったことは、大変喜ばしいことである。一方、歌曲、特にピアノのためにかけられた作品を電子オルガンで演奏する機会は少ないものの、「編曲された新しい作品」としての位置はまだ確立されていないのが現状である。

私は「編曲・演奏」にこそ電子オルガンの醍醐味であると常々考えている。発想の転換による新しいアプローチを、世間に発信していくことによって電子オルガンの魅力的な側面を伝えてゆけたらと思う。ここでは効果的なより良い編曲について、特に歌曲伴奏に焦点をあてて述べてゆきたい。

声楽曲編曲の意義

何故声楽曲に焦点をあてたのか？ まず第一に人声と電子オルガンとは相性が良く、アンサンブルが成立しやすいことが理由として挙げられる。第二に、多くの声楽曲の場合、伴奏形態の変化は日常茶飯事で、例えばカンツォーネ等はギター1本の伴奏もあれば、オーケストラ伴奏のものもある。つまりブラームスのヴァイオリンソナタを演奏するよりは、はるかに電子オルガンが独自の世界を構築しやすいと考えられる。

電子オルガンの特性をふまえた編曲

現在の電子オルガンはオーケストラの音色が各段に進歩しており、そのため編曲の場合その音色をしようする事が一般的となっている。しかしオーケストラと一口に言っても多様な様式・スタイルがある。また通常オーケストラに含まれない楽器（ギター、和楽器等）も一興である。肝心なことは、どのような編成で演奏するのかというイメージを、強く持つことである。

編成を考える際は、ピアノの為に書かれた楽譜を注意深く読み、推敲することが重要である。例えばアルペジオの пассажиも音域によっては適する楽器も違ってくる。低音が四分音符で書かれている場合でも、ピアノならばダンパーペダルで伸ばしているかもしれない、あるいは全く伸ばさない方が効果的かもしれない、等々の細部にわたって再構築が必要となる。編曲とはこうした作業を伴うものである。そして、多種多様な編成を容易に持てる電子オルガンだからこそ、編曲作業を充分に行うべきなのである。

2台使用のメリット

オペラのオーケストラ演奏においては最も一般的になっているが、声楽曲においても2台の電子オルガンを使用することを推奨したい。何故ならば、1人で演奏する場合よりもポリフォニーをより立体的に作る事が可能であり、またアンサンブルも容易なので、指揮者不在の声楽伴奏の場合は特にメリットが大きいと考えられる。また、編曲段階から協同作業のできるパートナーにめぐり逢うことも大切である。

まとめ

電子オルガンはクラシック演奏において、しばしば困難な壁に突き当たる。特にオペラ公演においては、オーケストラの「代用楽器」のイメージをどうしても拭いさることができない。しかしそもそもスピーカーを通したサンプリング音が生楽器と違うことは当然なのだから、全く別の「楽器」として捉えるべきではないだろうか？ 最良の音色を採る努力は無論必須であることを前提として、電子オルガンという楽器でどのような音楽を表現するかということが、最も重要であるように思う。そして、その表現の可能性として声楽曲に取り組むことは、新たな想像を喚起する、大変魅力的で有意義なことだと確信している。

「M.L.共同研究会」活動報告

森 直紀（昭和音楽大学）

昭和音楽大学では大学施設として保有するM.L.教室の有効利用を図るために、平成16年「M.L.共同研究会」を発足させた。研究会のテーマとしては、高等教育機関としてM.L.機器がどのような授業に適しているかを考察し、またその授業運営のために必要な技能およびM.L.機器の操作方法の習得を目指した。

実際の研修を通してM.L.機器の特長は他者との遮断性を確保しつつ、「調整卓と子機」「子機と子機同士」の応答による個別練習が可能であることが検証出来た。また、端末機としての電子キーボードの持つ特性については以下のようにまとめられた。

長所

1. 電氣的に合成された複数の楽器模倣音を使用して演奏することが可能。
2. 音を外部に対して遮音し、ヘッドフォンを聞きながらの演奏が可能。
3. リズムボックスを用いリズム楽器との協奏が可能。
4. 音高ピッチの機械的上下変更により移調が可能。
5. フロッピーレコーディングシステムにより、多重録音、一人で行うアンサンブルなどが可能。

短所

1. 電子音特有の音質であるため、楽器本来の音質に限界があり、アコースティックな楽器には及ぶべくもなく、必ずしも心地よい音とはいえない。
2. 長時間ヘッドフォンを使用して演奏すると聴覚に悪影響を及ぼしかねない。
3. 鍵盤のタッチが本物のピアノとは異なるため、微妙なニュアンス、音量や音色の差をタッチにより表現することはかなり制限される。
4. どのようなタッチでも音が出せるため、指の強化の必要がなく、本当のピアノを弾く際に必要とされる打鍵方法が身につけにくい。
5. 楽器の構造上、鍵盤打鍵時の反発力の吸収性が少なく、指が直接受ける衝撃が大きいため、長時間の使用により指を痛める可能性がある。

以上の長所短所を踏まえその特長を生かせる大学の授業としては、『ソルフェージュ』『鍵盤和声』『即興演奏』『即興伴奏』『合奏』『教職教材指導』などが考えられる。これらの授業内容は、作曲、ピアノ、声楽、など多分野にわたっており、それぞれの専門家が、M.L.機器を十分活用しきれてこそ十分な効果が期待できるのであるが、M.L.機器操作に精通した教員はまだ少ないのが現状であろう。その原因としては、教員のM.L.に対するモチベーションの低くさと、操作能力を身につけるために必要な学習施設の不足があげられよう。将来のM.L.による教育の普及のためには、演奏楽器としてではなく教育機器としてのその有効性を広くアピールしてゆくことが第一と思われる。

またM.L.の特性を生し音楽的能力を総合的に育成できるようなカリキュラムの新設なども、M.L.普及のためには有効であろう。具体的には複数の分野別教員によるチームティーチング形式の授業などが魅力的と思われるので、今後大学教育の場で提唱してゆきたい。

高校音楽教育におけるテクノロジーの活用法と今後の課題

木村 英寛（浜松学芸高等学校）

ITテクノロジーの進歩と、それに依存して成長を続ける商業音楽を踏まえて考えると、高校音楽教育におけるテクノロジーの活用と教育は、大変重要な課題と言えるのではないだろうか。現在、音楽作品を制作する課程は、様々なテクノロジーに支えられ、シンセサイザーなどの電子楽器はITと融合化し、パソコンすら「楽器」として使用される事も少なくない。こうした現状を見ると、今後このようなテクノロジーに関する知識は、従来の楽典や作・編曲法と同等の重要性を持ちつつある。音楽教育の初期段階である高等教育において、これらの基礎知識習得を前提とする授業を展開する必要があると考えられる。

1. 電子音楽の歴史とその変遷

ピアノの構造的発展が音楽のそれと同調しているように、電子音楽の歴史も電子工学というテクノロジーと道を同じくしている。また、一口に電子音楽と言っても、その定義は大きく分けて二つあり、昨今ではそのどちらでもない定義も生まれつつある。以前は電子機器や電子音を使って構成、または演奏された音楽を電子音楽としていたが、現在では私達が日常触れる音楽の大半はテクノロジーによって支えられていると言っても過言ではない。そうした歴史を踏まえて、現状を分析していく。

2. 現状におけるITと授業の連携

現在では、高校などの教育機関でもテクノロジーやコンピュータに触れる機会が以前と比べ格段に増えている。しかし、教育機関で行われているそれらの授業は専ら基礎や事務的なものにとどまり、音楽教育に限定して言えば、そうした授業すら少なく、現状では高校段階で電子音楽を学ぶ事は難しい。しかし一方では、インターネットの普及・高速化の恩恵を受けて、50分という短い授業時間の中でも、生徒が様々な音楽に触れたり、首都圏に居なくとも最新の設備をオンラインで見学したりすることも可能となってきている。こうしたことから、高校音楽教育の中にテクノロジーを積極的に取り入れる事は、普通教育でのそれ以上のメリットを持っているのではないだろうか。

3. テクノロジーを利用した授業の実践

本校は本年度、世界的な需要の増加や音楽教育的利用価値、米国での先進的な音楽配信の状況を見て、Apple社のコンピュータを高校音楽教育機関としては全国で初めて導入した。これは、Apple社が持つ、ハードウェアとソフトウェアの相性の良さやその利便性、そして今後始まるであろう日本におけるオンライン音楽配信を積極的に授業に取り込む事を見越して行われた。また、教育ソフトウェアとしては、Digital PerformerやReasonといった、現在様々なミュージックシーンで使われている実用的なものを用意し、MIDIやAudioの基礎知識はもちろんの事、3年次には映像など音楽以外のものとのコラボレーション作品を生徒が自分の力で制作できる授業を展開している。また、生徒1人に対して1つのアカウントという手軽なアクセス環境を構築した事や、iPodを利用した「聞こえる」教材の配布により、従来では難しかった短時間で音楽素材の検索や、アバウトになりがちな音の違いを繊細に聞き分ける能力の育成を可能にした。

実践としては、iPodの教材利用、Digital PerformerやReasonを使用した音楽制作の実践、iTunes Music Storeの活用を行ない生徒自身の音楽観を広げるのにも非常に役立っている。

4. 実践をふまえた反省点と今後の課題

テクノロジーの導入によって、従来では不可能だった科目をスリム化し授業内に取り込む事ができるようになった。また、実際に使われている機材を使用して授業を行う事で、仕事に直結した人材の育成が可能になった。しかし、そういった中で基本的な演奏能力の低下や、楽典や和声といった作編曲能力の低下が際だった。本校では、本年度から同じくして始まった新カリキュラムの中で、この2つに関する授業時間を増やしており、今後こういった授業を両立させて、新たな人材を生み出していきたいと考えている。

韓国における電子オルガン音楽の認知

～演奏活動を通しての反応～

田中 久明子（電子オルガン指導者）

私は、主人のソウル日本人学校への転勤で小学生であった子供二人と2000年4月から3年間ソウルに滞在した。当初、なれない家事に追われていたが、韓国語を習うようになって徐々に韓国社会とコミュニケーションができるようになり、私の専門とする電子オルガン（エレクトーン）との関りあいをもつことができるようになってきた。そこには、日本で想像していた状態とはかけはなれた韓国ならではの困難が横たわっていた。滞在中に関ったコンサートは多くはないが、その中のいくつかを通して、韓国における電子オルガン普及の現実の姿の一端を紹介し、今後の問題点を探りたい。

ソウルは日本人会の活動が盛んだ。その中のひとつに混声コーラスがあり、その指導をされている先生から伴奏の依頼を受けた。毎週練習を重ね年末にクリスマスコンサートを開いていた。日韓交流も兼ねているこのコンサートは、韓国側からも沢山の方々に参加しており、日本人は韓国語で韓国の曲を歌い、韓国人は日本語で日本語の曲を歌うといった民間交流もあった。私は、ピアノ演奏では盛り上げにくい曲の伴奏を主に依頼された。エレクトーンが使われたコンサート後の打ち上げパーティ会場では、韓国にまだ普及していないエレクトーンについて多くの質問を受けるのが常であった。

また、ソウル日本人会（企業で在韓している人達を中心とした会）が主催する忘年会ではBGMを任された。これは大使館の大使も参加される盛大なパーティである。その席で司会の方から、今から大使がくじを引くのでなにか効果音をお願いしたいと依頼され、エレクトーンの機能を活用してその要望に応えるなどした。変わったところでは、日本人学校で毎年行われているPTA主催の収益の一部を日本人学校に寄付する行事があり、模擬店やバザー、リサイクル販売等があり子供達はもちろん、父兄や韓国人の方々も楽しみにしている恒例行事だ。ここでも子供達の好きなアニメの曲を中心にエレクトーンを演奏したが、この楽器を聞いて関心を持った韓国の男子学生からエレクトーンを習いたいという要望を受けた。しかし当時の韓国ではエレクトーンが普及していなかったため、練習することが出来ないためレッスンをあきらめざるを得なく、エレクトーンが普及していればと悔やまれた。これらの三つ行事は私が帰国する2003年まで毎年参加した。

2002年には、日韓共同開催のワールドカップが開催されたが、記念行事が韓国国内各地で開かれ、仁川国際空港でも世界の紹介ブースが設けられた。日本ブースでは子供達が法被を着てよさこいソーランを踊った。その盛り上げとして踊りの前に何曲か演奏をした。空港内で興味津々に来港者が聞いていた。

ワールドカップを記念して日韓童謡コンサート記念行事も行われた。韓国、日本の子供達1000人が参加しての大規模なコンサートだ。日本側からは日本人学校小学部、中学部の生徒が参加しました。私は小学部の生徒が歌った“さくらさくら”の伴奏を担当した。現地の人からの感想を頂くことができなかった事が心残りだ。

演奏活動の締めくくりとして帰国直前感謝の気持ちをこめて3年間お世話になった方々を呼び100人位のミニコンサートを開いた。日本人はもちろん韓国人の方も沢山来場してくれた。会場のオーナーはこんなことしたことない と嫌悪感丸出しだったがコンサート終了後見たことも聞いたこともない楽器の演奏に驚いた様子だった。昨年第2回目コンサートをソウルで開催したが、自主企画コンサートのため聴きにきてくれる人はいるのか？という不安を抱えて望んだ。韓国人の方々にも助けをもらい無事にコンサートを終えた。来場者は初めてエレクトーン演奏を聞く人ばかりだった。演奏曲目は広い分野から選曲したが年齢、お国柄で好みが随分違うようだった。

終わりに まだ韓国で普及していないエレクトーンを日本人より情が深い韓国の沢山の人々にどのような形で演奏発表していくのが一番良い方法なのか未だ模索中だ。

研究発表

「唱歌ボランティアにおける電子キーボードの役割」

小沢 真弓（市川市社会教育指導員）

7年ほど前ヘルパーをしている知人に請われ、私は主宰する音楽教室のメンバーと、リコーダーの演奏や合唱を高齢者施設で定期的に演奏するようになった。この事は「音楽療法」「生涯教育」「高齢者問題」などを次々に学ぶきっかけになり、次第に現在の活動の「スタイル」に変わっていった。音楽が医学的に効果があるということとは周知のことと思う。単に演奏を聴かせる「慰問」ではなく施設入居者の方々が積極的に参加できる「唱歌」を導入し、様々な効果をねらおうというものである。そして、この「スタイル」に電子キーボードは欠かせない存在なのである。

歌の伴奏に楽器は必要不可欠。「ピアノはあります」といわれて行くと、たいていピアノはない。施設の備品となっている楽器はほとんどが寄付されたもので、あればまだ良いほうだ。大半が中古の電子楽器である。施設が「楽器」として受け入れるものはメンテナンスの心配の少ないということから電子楽器が多くなる。しかし受け入れた楽器の大半は調整不足で、演奏者を呼んで聴かせるところまでなかなか実現しない。また持ち運べるからと気軽に購入された電子キーボードは、小型なのに機能が多すぎて、単純に使うのが難しい。やがて職員がデモ演奏のスイッチだけを使い、入居者はそのなじみのない音楽を聴かされ、そのうちだれも触らなくなる...人間同様、鍵盤楽器たちの「老後」がここにもあるのかもしれない。こうした施設の現状にあっても電子キーボードを選んだ理由は、次の4つの大きな利点があったからである。 移調機能 OUT 端子 軽量

擬似音

音楽療法の研修会で「男性用の音楽療法を誰か考えてください!」とある医師の方が口にしていた。現在施設に入居している世代の男性には「歌舞音曲は女子のすること」という考えが強く、参加するまでも時間がかかる。ただ、小学生の時に歌った唱歌を声変わりしてしまった声で歌わなくてはならない男性の方々にも同情する。そこで楽器はどうかと考えている。私が生涯教育の場で今年実施したものに男性キーボード教室があり、生涯教育的にも様々な効果を実感した。これを高齢者にも応用できないかと模索中である。

20世紀のテクノロジーの申し子のようなこの楽器の進歩は、電子オーケストラや教育機器にまで採用され素晴らしい発展を遂げている。一方で、「電気製品」として低価格で量産されおもちゃ化されてしまった現実もあるのではないだろうか。音楽家だけではなく一般の人々を、特に弱者と呼ばれる人々までを対象にして、おもちゃではなく楽器として、その特性から生れる有意義な機能と使われ方をもっともっと議論すべき時がきているのではないかと考え、研究機関やメーカーに期待している。

「科学技術と身体性～電子オルガンを足場として」

森松慶子（国立音楽大学）

電子オルガンには“現代”という時代の一断面が象徴的に投影されている。現代に生きる私たちの日常生活は、発達した通信手段や情報処理技術により、身体から遊離して記号の世界を浮遊するかの如き側面も持ち始めている。しかしその一方で、私たちは常に身体を通してのみ世界と接していて、本来私たちの認識の構造や感性、思考も身体という地平に根ざしている。電子オルガンにも同様の構図が成り立つ。身体を使った生演奏の限界を軽々と飛び越えられる諸機能を搭載する一方で、奏者が全身で楽器に向かうための三段鍵盤というインターフェース（いくつかの例外的モデルはあるが）を備えたこの楽器は、“いつでもどこでも”均質な成果を期待できる科学技術の恩恵を受けつつ、“今ここで”しか出会えない身体に根ざした生（音楽表現）を全うするための実験場となりえる。これはある意味“人間離れした”科学技術の産物に取り囲まれた環境にあって、いかに人間としての生を地に足のついたスタイルで全うするか、という問題と重なり合うだろう。また現代は、科学技術によって可能になる事をすべて実際に形にして良いのかどうかを、倫理や哲学の視点からも問いながら進んで行かねばならない段階に入っている。電子オルガンもまた、機能的に可能なことをすべて実現するのか、それともある地点で意図的に限界を設けたほうが自らの望む音楽に近づけるのかを、楽器に向かう人それぞれが吟味すべき局面を迎えている。私たちは電子オルガンに関する考察を足場として、同じ現代に直面している他の様々な分野と問題意識を共有できるのである。

筆者は1992年に東京芸術大学に提出した卒業論文で、電子オルガンのアイデンティティを語るためにはこの楽器を演奏する際の身体性をクローズアップすることが不可欠である、と結論づけた。音色や機能からは独自性が導き出せない。演奏者がどのように音楽を体感し、またそれが作品にどのようなテクスチュアとして現れるかが、この楽器の独自性を読みとる重要な切り口となる。

楽器や演奏について学術的に、あるいは審美的に語る際、従来は物体としての楽器の静的な姿や、鑑賞されるものとしての演奏もしくは音楽作品にアプローチするという手法が主流であると言える。しかし楽器は、見られたり計測されたりする以前に手に取られ、演奏されるものであり、音楽作品は誰かが演奏するのを聴く以前に、自ら演奏してみるものである。そして、演奏される楽器と演奏する身体の相互的な関係をないがしろにしては、演奏者や教育の現場にある人々の実感を反映した記述も不可能であろう。

楽器演奏を身体性から見地から読み解く試みには、メルロ＝ポンティに代表される様々な思想や音楽学の諸分野における先輩諸氏の研究が大きな道標となる。筆者は自らの資質の及ぶ限りそれらに学び、電子オルガンの演奏の現場における姿を生き生きと語れる言葉を模索したい。それが電子オルガンをを用いた創作や演奏、教育といった活動の基盤を堅固でより豊かなものとするにつなげれば望外の喜びである。

研究発表

芸術家が創りだした楽器「オンド・マルトノ」とその作品

久保智美（オンド・マルトノ奏者）

20世紀初め、フランスで生まれた「オンド・マルトノ」。電子キーボード楽器の歴史を紐解く際、必ず「オンド・マルトノ」という言葉を目にするに違いない。しかし、多かれ少なかれ楽器の存在は知られていても、この楽器の為に書かれた作品まで知られることはあまりない。現在、世界中でオンド・マルトノを使った新作が生まれている。なぜ作曲家はこの楽器に興味を持ち、曲を書くのか。20世紀の代表作ともいえる「トゥランガリラ交響曲」の作曲家オリヴィエ・メシアン。彼はなぜオンド・マルトノの為に曲を書き続けたのか。

この楽器の発明者モーリス・マルトノ。彼はチェロ奏者、指揮者としても活躍し、何と云っても電氣的知識に長けていた。第一次世界大戦時、通信兵として召集され、そこで三極真空管から発信される音に注目し、これを音楽に利用できないかと考えた。10年以上にわたる研究の後、1928年パリ・オペラ座にて最初の公開演奏会を開きセンセーションを巻き起こし、その後、カーネギーホールを始めアメリカ各地、そして日本でも演奏会を開いた。1937年パリ万博にて、メシアンはセーヌ川で繰り広げられる水と光の音の祭典をテーマに、オンド・マルトノ6台の為に「美しき水の祭典」を作曲、大成功を収める。またジョリヴェ、ミヨー、オネゲルなどフランスを代表する作曲家たちも、オンド・マルトノに大変興味を示し、映画、演劇、シャンソンに至るまで様々な分野で使用された。

電子楽器なのに非常に人間味を感じる楽器。裏表24本の共鳴弦が張られ、この弦に音を伝えることにより弦が振動し柔らかな響きを出す「パルム・スピーカー」。銅鑼に音を伝え振動させることにより、金属的な響きを得る「メタリック・スピーカー」といった独特のスピーカーから奏でられる音。そしてピブラートが掛かる鍵盤での奏法、鍵盤手前に張られた細い糸につけられた指輪をはめ、ポルタメント、ピブラートを駆使し旋律を歌い上げるリボン奏法。このような独特の音色、奏法を持ち、奏者一人一人の個性をダイレクトに感じられる楽器だからこそ、作曲家が興味を示すのではなからうか。

オンド・マルトノという楽器でしか表現できないこと、そしてあくまでも「人間が演奏する楽器」というポリシーを持ち楽器を追求し続けたモーリス・マルトノの「芸術」は、どんな最新のテクノロジーにも負けず劣らず、今後も語り続けられると思う。今回はこの楽器のしくみ、歴史を知って頂きたいのはもちろんだが、なぜ作曲家達はこの楽器に興味を示すのか、一体どのような作品が残されているのかという点にスポットをあけるとともに、現在置かれている電子キーボード楽器の位置付け、そして電子キーボード楽器ともいえる

オンド・マルトノはなぜ独自の道を歩んできたのかを考えたい。

「最新型電子オルガンとマルチトラックアサイン」

小熊達弥（サウンド・インターフェイス）

ステージア（ELS - 01C）マルチトラックアサインとは、エレクトーンのありのままのパフォーマンスを用いたレコーディングシステムで、その分野の世界最高アーティストのレコーディングレベルを基準としたものであり、レコーディング・パフォーマンス、コンテンツを分析し、楽曲上、編曲上、サウンド上でその基準で補填、サポートを行い世界第一級のレコーディング・ソリューションとするものである。

小熊キーボードスタジオは、1983年に日本で初めてエレクトリックキーボード専用スタジオとしてオープンをして、数十台に及ぶ電子キーボードを所有し、数々のレコーディング活動を行ってきた。現在、全世界唯一の100万円を越える量産シンセサイザーとしてのエレクトーンや歴代中核機種のを所有しレコーディング活動を行っていることは言うまでもない。

また業界標準の業務用録音及び波形編集システムであるプロトゥールズ HD Accel Ver.6.7、専用コントロールサーフィス Controll | 24 と数々のヴァーチャル・インストゥルメントが当スタジオの中核レコーディングシステムであるが、その中にエレクトーンが存在する環境は日本唯一であると言っても過言ではないであろう。このような環境の中でマルチトラックアサインは誕生したのである。

ELS-01Cのパフォーマンスの各音色データ、演奏データをプロトゥールズ、セッションファイル上に波形データ、MIDIデータとして最大30ch.にも及ぶ完全独立トラックの形で抽出を実現可能（日本で初めて）とした。

これによってエレクトーン側でのマスター操作、プロトゥールズ側でのマスター操作が自由自在に行えるようになり、テンポデータの修正、追加、新規ヴァーチャル・インストゥルメントでの多重録音、別スタジオでのアコースティック録音等、いかなるレコーディングオペレーションにも対応可能になった。

一例をあげれば、これにより別に演奏されたスコアリーディング奏法によるエレクトーンによるオペラ伴奏をマリアカラスの歌っているアリアのオーケストラ伴奏と秒単位、拍単位による後追いで完全復元が可能になり、かつそのサウンドで新規にソロパート、合唱パートを録音することも可能である。

またピアノ愛好家、ピアノ音大生、ピアノ指導者の夢であるピアノコンチェルトをピアノソロ演奏に後追いでエレクトーン演奏によるオーケストラパートを完全復元したり、著名な指揮者やピアニストのピアノコンチェルトの音楽表現に合わせたレコーディングを完成させることもできるのである。

以上のように、オーケストラの代替え楽器としてライブで演奏してきたエレクトーンやシンセサイザーがレコーディングレベルでアコースティック楽器によるレコーディングと対等に渡り合えるシステムに昇華できたことは、このシステムがピアノの演奏者、指導者にとって多大なる支援になることを確信するものである。なぜなら、大衆が音楽を享受するシステムとは90%以上がレコーディングによるからである。

J.E.K.S. CONCERT

ポピュラー音楽のライブ演奏では、複数のメーカーの電子キーボード(一段電子鍵盤楽器)が当然のこととして一緒に用いられ、共存しているが、電子オルガンの場合はこのようなことはまず起こり得ない。これは電子オルガンが主としてメーカー別にソロ楽器として普及されてきたことによるものと思われる。したがって、このコンサートのように 3 つのメーカーの枠組みを超えたものは、学会ならではの極めてめずらしいものではなかろうか。

ここでは、ドリマトーン(カワイ)、ミュージック・アトリエ(ローランド)、エレクトーン(ヤマハ)のソロとアンサンブル演奏が披露される。今回、3 社には楽器運搬などご協力を願った。

Program

電子オルガン・ソロ

C.ドビュッシー 前奏曲より“沈める寺”ほか 大石純都(カワイ/ドリマトーン)

映画サルサより“これは僕の歌そして君の歌”ほか 熊埜御堂可奈子(ローランド/ミュージック・アトリエ)

曾夢 組曲「夢」より“眠りにつく”“迷宮”ほか 曾夢(ヤマハ・エレクトーン)

電子オルガン・カルテット(カワイ、ローランド、ヤマハ)

・F.スッペ“軽騎兵序曲” 野口剛夫(指揮) 中村笑美 武井鮎 小倉裕子 杉田香織(電子オルガン)

Performers Introduction

大石純都

9歳よりドリマトーン、15歳よりピアノを始める。カワイ音楽学園本科、同研究科を首席で卒業。98年カワイドリマトーンコンクール全国大会金賞受賞。現在、信愛学園高等学校卒業生による演奏家集団“ムジカ・エ・フェリーチェ”に所属し、毎年演奏活動を行っている。ドリマトーンソロ、ピアノとドリマトーンのデュオ、声楽・合唱・ダンスの伴奏など、多方面で活躍している。また後進の指導にも力を注ぎ、ピアノ・ドリマトーンコンクールの入賞者を多数輩出し、最優秀指導者賞を受賞。

熊埜御堂可奈子

4歳より電子オルガンを始める。東京コンセルヴァトアール尚美(現、東京ミュージックアンドメディアアーツ尚美)器楽科卒業。ローランド・オルガン<ミュージック・アトリエ>デビュー時より、日本全国はもとより海外でも演奏活動を行っている。1998年10月に全英10都市、1999年マレーシア/シンガポール、2000年にはオーストラリア8都市でコンサートを実施。2002年、2003年には香港でクリスマス・コンサートを行い、好評を博した。現在、ローランドオルガン専属奏者

曾夢(Zeng Meng)

4歳よりピアノをはじめ、Wuhan 音楽学院附属高等学校でピアノを専攻の後、上海音楽学院で電子オルガンを朱磊教授に師事。2001年インターナショナル・エレクトーン・コンクールでファイナルで入賞。その卓越した技巧と情熱的な演奏は、聴衆に大きなインパクトを与えた。2003年の日中友好30周年コンサートをはじめとして、毎年、数多くの演奏活動を行い中国の電子楽器の普及に貢献している。また今年は、上海をはじめ6都市で連続コンサートを開き大反響を呼んだ。彼女は中国を代表する優れた電子オルガン奏者であると同時に、上海音楽学院講師として後進の指導にも当たっている。

電子オルガンカルテット

電子オルガン演奏は昭和音楽大学電子オルガンコース2年生有志。この曲は2年生の自主コンサート「温 MUSIC」で9月に演奏した。指揮者の野口剛夫は、月刊「音楽の世界」編集長、フルトヴェングラー研究会代表、JEO(Japan Electronic Orchestra)音楽監督、昭和音楽大学講師として電子オルガンアンサンブルを指導。